

⑤『反西洋思想』I・ブルマ&A・マルガリート 2006年 12月3日

石積

序章 オキシデンタリズムとは何か

「近代の超克」座談会=1942年7月京都：戦争協力のプロパガンダではなく、思想的問題に直面する会合は戦前から。

<「日本の血」対「西洋の知」>

*西洋文明同様、個人主義も民主主義もよろしくない。

*日本文化=精神的・深遠・・・・・・・・・・慈愛に満ち有機的

西洋文明=軽薄・創造性を破壊する物・・・特にアメリカは冷淡で機械的

*日露戦争についてのトルストイの評価「日本の勝利はロシアのアジア的魂が西洋の物質主義(日本の近代的軍備)に屈した結果」

<右翼でも左翼でもなく>

似たような意見が、世界中で人々を感化し続けている。「近代の超克」という願望はマルクス主義に傾倒したインテリの間でも右翼の排外主義者の間でも同様に根強かった。同じ傾向が今もある。

*「オキシデンタリズム」：「敵」によって描かれる非人間的な西洋像

*偏見の数々を検討しその歴史的ルーツをたどること=本書の狙い

*オキシデンタリズムがイスラム固有の問題でないことは明らか。・・・あらゆる場所で発生しうる病気。

本書の主張の一つ=：「オキシデンタリズムはヨーロッパの中で生まれ、その後に非西洋世界へと異動していった」

<宗教と政治の一体化>

*宗教改革・ルネッサンス・自然科学の台頭=ヨーロッパ精神文化の崩壊として批判(哲学者 西谷啓治)・・・理想は政治と宗教の一体化

<アメリカニズムへの憎悪>

ヒットラー：日本人は「生活と文化において我々とあまりに違いすぎる」しかし「アメリカニズムに対する私の感情は、深い憎悪と嫌悪だ」

ハイデッカー：ヨーロッパ魂を蝕む「アメリカ主義」を批判

アナトール・メラー・ファン・デン・ブルック：アメリカらしさは「地理的に理解されるべきものではなく、精神的に理解される性質のもの」・「人間が

地球への依存から地球の活用へ並行する決定的な一歩であり、無生物すら機械化して電流を流すもの」

＜オクシデンタリズムとオリエンタリズム＞

オクムの中の西洋像はその双子の片割れとも言えるべきオリムと呼応している。オクムもオリムと同様、相手を人間未満に過小評価する傾向あり。

＜理解すること＞

＊あらゆる地域、あらゆる時代に存在したオクムの中の「共通の要素」をとりあげる。

＊敵意が向けられる矛先＝「都市」

＝「西洋的思考」

＝「ブルジョア階級」

＝「不信者たち」

＊何がオクムの原動力になっているか。自爆やジハード戦士は特別の病理にかかれているのではなく、長い歴史を持つある一定の考え方によって突き動かされている。

まずは我々が西洋を憎む人達のことを理解しよう。そうでなければ彼らが続けている人間性の破壊を止めさせることなど望みようがない。

第一章 西洋の都市

西洋を憎むのは近親者（北京・上海の中国人、ビンラデン・モハメットアッタも教養ある若者たち）である。「人間の作った罪深き都市」という概念・・・慢心・帝国建設・世俗主義・個人主義・金銭の力と魅力・

＜バビロンの都＞

バビロンの民はさながら14世紀のフィレンツエ市民、21世紀のニューヨーク市民のごとく世俗的な名声を求める。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」（創世記11・4） 神による人造都市への復讐劇

＜都会＝売春婦＞

資本主義とボルシェビズムは思想的には正反対だが共に「神の世界」を「人間の世界」に置き換えようとする点では共通。売春婦：商売によって成り立つ都市社会の比喩。

＜ユウエナリスとゴンクール兄弟＞

＊ 都会人は嘘つき。詩人ユウエナリスの古代ローマ「汚れた金が真っ先にもたらしたのは、外国のふしだらなモラルと我々を徐々に破壊する卑

しむべき放蕩だった」。特にギリシャ人・ユダヤ人、女性一般。商品化された人間関係の象徴＝売春婦

- * フランスの作家ゴンクール兄弟の話。1860年代—貪欲なぜんまい仕掛けの人形のような娼婦＝都市の、資本主義の、西洋機械文明のイメージ

<ブレイクとエリオット>

- * ウイリアム・ブレイク：1800年代イギリスの地に神の都エルサレムを興そう。
- * TSエリオット：「岩からのコーラス1934」神と競争しようとする人間の野望に対する悲観を隠さない。
- * 世界貿易センタービルを、アラールと聖戦の名の下に破壊した行為は、エリオットの詩と響きあう。ジハード戦士たちにとっては近代の「人間の都市」にまつわる嫌悪すべき物、全てを体現した建造物。

<西洋都市への憎悪の起源>

- * 初期イスラム教；都市生活は遊牧民族の無知を救うものとしてかえって推奨されている。バグダッド・コンスタンチノーブル：貿易学問娯楽の中心地。
- * 北京の洗練された文明、江戸の人口密度。それでもバビロンの大都会のイメージは西洋と強く結びついている。＝最初のオキシデンタリストたちがヨーロッパ人だから。

<ワーグナーのフランス嫌い>

<ボルテールのイギリス観>

- * 19世紀ロンドン：とてつもない富の不均衡、同時に都市や個人の自由がかなり保障されてもいた。
- * 彼がロンドンで賞賛した物＝「王立証券取引所」——商業こそが人間が自由を確保するための重要条件。金銭は信条や人種の違いを解消する。市場では生まれはあまり重要ではない。しかし同じ法律も宗教的ないしは封建的な価値観を持つ人々の目には、冷淡で、機械的で、非人間的とさえ映る。・・・
- * 現代のオキシデンタリストの敵は、アメリカ、英米連合、西洋全般、さらに「十字軍・シオニズム連合」にまで拡がっている。

<金と自由を求めて>

- * 1862ドイツから来た旅行者テオドル・フォンターネ：「この巨大都市(ロンドン)には精神性もなければ詩もない」
- * エンゲルス：「人間性が反発する何か」「自分勝手に」利益を追求する「孤立した」人々からなる社会。団結の欠如。

＜悪者はいつも西洋風＞

- * ヨーロッパのギャング映画：悪者はアメリカ風の服を着てアメリカ風に振舞う。
- * 1950年代の日本映画：主人公は着物を着て日本刀で奮闘するのに対して悪者はウイスキーを飲みスーツを着て拳銃で敵の相手をする。

＜日本の歴史的記憶喪失＞

- * 日本のインテリは1920-30年代のドイツのナショナリズムから多大な影響を受け、その反西洋観、反都市観を受け入れた。ここには記憶創始がある。なぜなら江戸時代の社会が1930年代の東京の歓楽街よりも「精神的」であったという証拠はどこにもないから。
- * 大衆の台頭を恐れる知識人

＜イスラム思想家の見たニューヨーク＞

1948サイド・クトープ(エジプト→ニューヨーク)「騒々しく」「やかましい」「巨大な作業場」

＜ユダヤ陰謀説の理由＞

- * 「近代資本主義」が西洋で生まれたのは確か。陰謀は「ローマ帝国主義」「英米資本主義」「アメリカニズム」「十字軍・シオニズム」「アメリカ帝国主義」あるいは「西洋」と呼ばれてきた。
- * ユダヤ人はイスラム・キリスト教の領世界において金融と商業に結び付けて考えられてきた。そのため反資本主義的な考えが語られる際には、必ずユダヤ人が登場してくることになった。
- * 一方でユダヤ人はフランス共和主義、共産主義、はたまた世俗的な法律など、西洋の普遍主義にも関与しているとされている。ナチスが糾弾したのはワイマール憲法を起草したユダヤ人弁護士も入る

＜起源はフランス革命＞

- * 革命が象徴した普遍性や理性至上主義への反発
- * ナポレオンはユダヤ人の手先という妄想→ドイツ人に感染→ヒトラー：市民権に挑戦→ワイマール共和国は「西洋の雇われ対抗勢力」→アジアの勢力に立ち向かう前にまず西洋との戦いに挑む＝大陸で芽生えた殺人的衝動を持つオキシデンタリズムの最たる例。

＜都市が田舎を支配する＞

- * トロツキー：資本主義の歴史は「田舎」(被植民地)に対する「都市」(支配国)の勝利の歴史。(これは観察であって批判ではない)

＜「オリエンタリスト」ヘルダー＞

- * 「冷たいヨーロッパは哲学(普遍的理性のフランス哲学)によって凍り付

いてしまった]

- * 容赦ない貿易システム＝暖かい分化に破壊と死をもたらした。
- * 「人間は みな自由になるべし」という主張は傲慢。自由は非人間性、無機質な物質主義に行く。

<両極端な西洋思想>

- * 西洋の直接支配から逃れたごく少数の国々(日本・中国)は西洋を寄せ付けない方法として西洋そのものからその思想を借りてくることであった。＝中体西洋・和魂洋才

<マルクス主義という希望>

- * 中体正用の考え方はまだ続く。「実利的」というレッテルを貼られた西洋の知識は「冷たく機械的なオキシデント」という固定観念をよりいっそう強固なものにした。
- * 「土着主義者」と「西洋化推進派」の分裂。
- * 何故社会主義思想が非西洋世界でもてはやされたか＝国家社会主義は正用の資本主義的帝国主義をまねているように見せずに、産業化された近代世界の一員に加わる方法を示した。
- * この近代化への代替ルートは失敗(エジプト・イラク・北朝鮮・エチオピア・キューバ、中国、ベトナム)→もっとも暴力的なオキシデンタリズム・・・西欧嫌悪

<オキシデンタリスト毛沢東>

- * 「都市に対する田舎の勝利」特に上海を身売りした都市とみなす。江青は凶暴な憎悪と強い憧れの象徴。毛沢東のもとで暖かい人間の絆が蘇り、人生はもう一度深い意味を持ち、人々は信頼を思い出すとされた。
- * 「田舎」がついに反撃に出たのだ。神がバビロンを戒めたように。現在ジハード戦士が試みているように。

<『田舎もの集団』クメール・ルージュ>

さらに極端な形で推し進める。

- * ポルポト：都市は「反逆者と悪者の家」。アルカイダ同様、復讐は現実的であり象徴的：古代からの土地に清浄と美德を取り戻す。

<タリバンの恐るべき拷問>

- * 最初の象徴的暴力行為：左翼メジブラ元大統領の睾丸切断。死体吊。ポケットには紙幣。指の間にはタバコ。目的は「神の都」。
- * 6人のシューラは誰一人カブール出身でない。

<サラエボを破壊したシェークスピア学者>

- * 実際は都市の内部から近代都市攻撃は行われることのほうが多い。ニコ

ラ・コルジェビッチ

<ヒットラーにとってのベルリン>

- * ベルリン大嫌い・・・しかし改造計画→「ゲルマニア」と改名されるはずだった。「神の都」に対抗する「死のバビロン」建設。
- * リベラルな西洋の特徴(市民の自由・市場経済・民主主義・芸術表現の自由・個人主義)の「超克」—完全に異種なものの支配。「比べられるのはバビロン、またはローマだけだ。ベルリンに比べればロンドンやパリなど、何だろうか?」と語る。
- * 平壤こそがゲルマニアの夢を継承。空っぽな柳京ホテル。
- * 上海の浦東地区の摩天楼。シンガポールやクアラルンプールのガラスと鋼鉄素材のタワービル。
- * これらの都市は西洋文明の粗暴なコピーを作り、西洋を超克していったのだ。

第二章 英雄と商人

「我々は死を愛している」

「アメリカ人はペプシコーラを愛してるが我々は死を愛している」(タリバン兵士)

<日本の特攻隊><ドイツの英雄列伝>

とは言え、死の崇拜はアジア人の専売特許ではない。1914ランゲマルクの戦い。「幸福は犠牲的な死の中にのみ横たわる」(ケルナー)ナポレオン戦争。7年戦争(1756-1763)「祖国のために死ぬこと」(アプト)。

<『英雄の国』という幻想>

- * ドイツナショナリストたちは自分たちを「西洋の敵」とみなし、これこそがドイツの英雄プロパガンダを他の西洋諸国と比べて特異なものにした原因。
- * 初代西独大統領アデナウアー(エルベ川を越えるたびに)「アジアだ」とつぶやいていた。

<ゾンバルトの「商人と英雄」>

- * 戦争とは「実存的な」戦い。イギリスとフランスは「西ヨーロッパ文明」「1978の理念」「商業的価値観」を体现。ドイツは高い理想のために自己犠牲をいとわない「英雄たちの国」

<フランス革命と商人意識>

- * 自由・平等・博愛・のモットーは商人的理想。それは個人を優位に立た

せる目的しかない。

- * 快楽(受動的・)と喜び(活動的)の違い=快適であるために西洋の商人たちは金を稼ぐがなければならない。
- * 彼らは安全と平和を求める。：戦争は商売に悪いから。
- * 人生の悲劇的要素を否定することを含め、商人はあらゆる意味で表面的。

<トクビルの嘆き>

アメリカ民主主義に賞賛を惜しまなかったトクビルでさえ、自由民主主義の限界を見ていた。貴族社会の偉大さを懐かしみ、より高い理想への魅力も感じていた。「崇高な理想は希薄である」

かくも多くの西洋の知識人がスターリンや毛沢東、さらにはヒトラーやムッソリーニまでも支持した動機のひとつは「民主主義の凡庸さ」に対する嫌悪だった。民主主義のオキシデント(西洋)に足りないのは犠牲と英雄的行為だ。毛沢東やスターリンと違い民主国家の政治家たちは「偉大さへの意志」に欠けている。

非西洋世界のインテリに最も受けが良かったのは「ドイツナショナリズム」だったのは驚くべきことでない。西洋帝国主義の主張に反発する物だったから。これはあらゆる面において西洋化した日本でもっとも顕著。

<日本のエリート>

- * 3ヶ国語を読みこなしたエリートたち
- * 驚くべき多数の者がマルクスの政治経済観を有していた。
- * 皮肉にも彼らの究極の犠牲(そして理想)は、しばしば西洋の観念によって正当化され明瞭に表現されていた。西洋に西洋を刃向かわせたのだ。自爆攻撃は必ずしも貧困後進性、外圧の結果ではなかった。ドイツでもそうだったように、日本における死の崇拜も、技術、文化、産業などが高い水準で洗練されていく中で起こった近代の現象なのである。

<ヒンズーナショナリズム>1920年代RSS

<神風特攻隊>

- * 神風特攻隊の戦った敵はアメリカだけではなかった。
- * 日本の腐敗・資本主義の利己的な貪欲さ・自由主義の倫理的空虚・アメリカ文化の軽薄と戦う、知的反逆者としてみている。
- * 軍国主義にはたいした魅力を感じていない。アジアでの拡張を腐敗した西洋帝国主義から輸入した別の悪習とみなしていた。

「狂気」を好むビンラデン＝神風精神との類似点多い。

第三章 西洋の心

<魂の思考と知性の思考>

西洋の心＝進歩した白痴・・・電卓のように効率的だが人間として本当に重要なことには絶望的に無能。西洋の心には精神性や人間の苦痛についての理解力が欠けているから。

<プロテノス>：推論的思考→魂の思考

非推論的思考→知性

西洋の心が主張する『合理性』には半分の真実しかない。

目的合理性はあるが価値合理性はない。

フランス人の空虚で無情な洗練 vs ドイツ人の深遠で精神的な内面生活、素朴さや高貴さ

<ロマン主義の世界観>

- * 外国人によって屈辱を味わされただけでなく、自国の政府によっても抑圧された場合、人はしばしば『内面生活』へと退却する。
- * 「内面」は純粹で単純であり、権力と洗練による腐敗からも自由。
- * ロマン主義—反啓蒙主義運動の一種：中世ヨーロッパ・初期のキリスト教・ロシア正教修道院の全盛期、古代の日本。
- * 全ては失われた過去の調和——つまり「一体性」——を回復する偉業の原点として呼び起こされる。

<ドストエフスキーの「ひねり」>

- * スラブ派の世界観では、人間が知性によって問題を解決しようとするのは間違いで、その代わりに救済を求めるべきだとされている。理性では人生の悲喜劇的側面を理解することは出来ない。

<神学に無関心なロシア正教>

- * ロシアでは、神学が発展する余地が少なかった。ロシア人が気にしていたのは儀式、典礼、修道生活のほう。
- * 素朴な畏敬を宗教への手引きにするとところがギリシャ正教やカトリック教会との違い。
- * ギリシャ正教では神格の性質について論争が繰り広げられた。ロシア正教では宗教は精神的なものであって、知的なものではない。大きな分裂も知的な相違から生まれたものではない。
- * ロシア宗教文化の中の、少なくとも二つの要素が、オクシデンタリズム

を先取り：ロシア正教信者のカトリック観、「革新」に対する深い疑念。

- * 新しさとは常に外からやってくる物。宗教的感性—教会の役割は新しい知識の源泉ではなく、集合的記憶の貯蔵庫。

<ツァーリたちの対西洋姿勢>

- * ロシア史の中の三つの中心地

①キエフからモスクワへ：孤立主義へのイデオロギー的変換

②モスクワからサンクトペテルブルグへ：

③Bサンクトペテルブルグからモスクワへ：

- * ヨーロッパの窓—ピョートル大帝の西洋熱—「西洋」がロシアを評価する際の唯一の物差しになった。
- * エカテリーナ大帝—インテリゲンチヤの登場。やがて敵視。外国書物の禁止。国外旅行の禁止。しかしインテリゲンチヤはロシアと西洋の関係を主要な課題として意識。
- * トルストイ：ナポレオンが象徴するものは、不自然で人工的なフランス精神。
- * ニコライ一世(1825-1855)時代の論争はスラブと西洋派の間でロシアのオキシデンタリズムは完全にイデオロギーへと変貌。スラブ派VS西洋主義。
- * シェリング：クロボトキンのようなアナキストからも崇敬された。共同のゴールを目指して動く有機体の考え方提供。契約によって結ばれる個人が構成する集合体という、社会についてのリベラルな概念のアンチテーゼ。スラブはの感覚にピッタリ。
- * ロシアはイギリス、オランダ、フランス共和国など代表される西洋社会とは正反対の社会だと見られるようになった。

<スラブ派の雄イヴァン・キレエフスキー>

- * 『新哲学原理』：西洋は腐った土台の上に立つ。抽象的断片的な理性。「合理主義」と「分別」を非難。アリストテレスこそが西洋の心を「分別」という鑄型にはめ込んだ張本人。
- * 分別は極度の平凡さへの執着。臆病者の西洋では極端な論を展開するものとみなされることは最悪で、そのレッテルを避けたい一心で人は独創性を恐れる。
- * アリストテレスはブルジョアの心、つまり西洋の心を持った最初の哲学者。主意主義：人間の行動が意志の力によってのみ起こされるべき。意思が理性よりも重要。

＜「ロシアのニーチェ」レオンチェフ＞

- * ハイデッカーとシュミットの政治神学にある「決断主義」では決断を下す指導者が神の役割を演じる。計算高い西洋は賛否両論を熟考することになり、動けなくなってしまう。
- * レオンチェフ(1831-1891)の『ロシアとヨーロッパ』大反響

＜合理主義批判＝西洋批判＞

- * キレエフスキーは人間の心を大学にたとえる。理性はその一学部に過ぎない。
- * 合理主義者は科学以外の知識の源－特に宗教－を迷信として片付ける。
- * 西洋が見せ付ける優越感に対する若い憤怒の表れ：心の帝国主義。
- * 現在のイスラム原理主義者の例からもわかるように、オキシデンタリストの直接の敵は西洋そのものよりも自らの社会の内にいる。

＜中国精神＞

＜ツルゲーネフの描いたニヒリズム＞

- * 「クリスタルパレス」への抵抗：ドストエフスキーは今日の自爆テロを「無数の事実」の一つに挙げたかもしれない。何らかの信念のために喜んで犠牲となって死んでいく人間がいることなど理解不能であるに違いないと。

第4章 神の怒り

＜宗教的オキシデンタリズムと世俗的オキシデンタリズム＞

- * 西洋に対する宣戦布告：ロシア魂、ドイツ民族、国家神道、共産主義、イスラム教
- * 「聖戦」に望むとき宗教的オキシデンタリズムは世俗的オキシデンタリズムより、マニ教的な善悪二元論を展開する傾向が顕著。

＜西洋＝偶像崇拜する未開の文明＞

イスラム教においては最悪の罪。

＜旧約聖書の中の偶像崇拜＞

＜シャーヒリーヤという概念＞

- * マニ教的世界観：我々は光から生まれ、彼らは闇から生まれた。
- * レーガン「悪の手国」「悪の枢軸」これはマニ教的言語。
- * さらに深い問題：マニ教においては物質は悪。
- * 宗教的オキシデンタリズムでは西洋との闘争は単なる政治的争いではなくマニ教的な宇宙のドラマ。
- * イスラム教でも善と悪の領域という考え方は異端とされている。しかし

無上にj費部会神と悪を一まとめに説明することの困難さゆえに一神教にもマニ教的傾向は残っている。

イスラム過激派に代表されるオキシデンタリストの核心：人間は性欲によって支配されている。肉体は神にふさわしいばかりでなく人間にとってすらふさわしくない。人間は魂で高貴崇高になる。ヒンドウ原理主義者、神道信望者にも共通。

ブルジョア資本主義は両陣営（オキシデンタリスト＋マルクス主義者）から「物心崇拝的」と非難される。

<イラン革命のパイオニア、アリ・シャリアテ>

マルクス主義のテーマを借用。宗教に潜在的な解放勢力を見出す。暗喩としての物心崇拝を急進的シーア派の彼は文字通りの偶像崇拝と受け取った。

<ケマル・アタチュルクの改革>

「科学こそ人生でもっとも信頼できる水先案内人である」19世紀後半の中国の改革派も同様。

<イスラム教における偶像崇拝>

- * ユダヤ・キリスト教における偶像崇拝の型： 誤った神への崇拝 誤った方法による正しい神の崇拝
- * イスラム教の偶像崇拝：イランの思想家サイード・タレカニ：革命的コーラン解釈：ユダヤ人とキリスト教徒を植民地主義の経済利益から潤う新しいタイプの偶像主義者

終章 思想の相互汚染

<ともに西洋原産だった両極端の思想>

- * 西洋帝国主義への対抗勢力のほとんどは、西洋からの思想を借用した。1867年に近代国家・日本を設立した武士たちは、西洋による植民地化から自己防衛するために西洋思想を取り入れた。それは「模倣による防衛」だった。彼らの理想はまるで、『古く新しい国』から直接借りてきたかのごとくである。・・・
- * 日本の土着主義者は魂を持たないオクシデントの近代と、それにはつらう奴隷のような東洋の従者から、古代文明の精神的純血を救おうとしたのだ。しかし反革命運動もまた神道や侍などの伝統的イメージをアップールしたにもかかわらず、西洋思想、特に反資本主義的な国家社会主義思想から多くを継承していた。

- * オキシデンタリストはオキシデントから完全に自分を切り離せない。
- * 「破壊しようとする制度の中心で醸成される革命」
- * 現代のイスラム革命の致命的なところは、宗教的狂信と現代のイデオロギー、古くからの偏狭と近代技術が、合成されているところにある。・・・
ボルボト・シャリアテ

<パース主義と汎ゲルマン主義>

- * パース主義=ファシズム+「有機的なアラブコミュニティー」へのロマン的ノスタルジア
- * ヒュスリの思想=汎ゲルマン主義(1920年代)に直接影響をうける。
- * イスラエルとパレスチナの戦争よりもはるかに多くの血がアラブ国家の中で流された。(?)

<眼をそむけるなかれ>

- * 我々の問題=いかにして西洋—すなわち世界の自由民主主義国家—という思想を、その敵から守るかである。
- * 問われているのは「何を考えるか」「どのように問題を想定するか」である。あるいは、「何を考えるべきでないか」
- * キリスト教原理主義者は十字軍について語るが、西洋はイスラム教徒戦争しているわけではない。
- * 実際はもっとも鮮烈な戦いはイスラム世界の内部で行われている。(現在のイラク)革命が起ころつつある場所はイスラム世界の内部。
- * 世界的な地殻変動は国民、民族、宗教などの境界線と一致していない。
- * 1940年代戦争は国家間でのみ行われた。今日の戦争は世界的規模の、組織的結束の緩い、殆んどが地下にもぐっている革命運動を相手に戦われなければならない。
- * 西洋の帝国主義は多くの弊害を招いた。しかし現在旧植民地で起こっている残酷な事態に無頓着であってはならない。
- * 蛮行をアメリカ帝国主義、グローバル資本主義、イスラエルの拡大主義などに責任転嫁するのは的外れ。オリエンタリスト的な東洋蔑視である。
- * オキシデンタリズムが危険になるのは、政治権力に結び付けられた場合だけだ。
- * 政治的、宗教的、知的な自由が既に確立されている国では、その自由を敵から守らなければならない。必要とあらば力を行行使し、何よりも信念を持つことだ。
- * 火で火を消そうとするのは間違い。
- * 宗教的権威が実際の政府に危険な影響力を行行使している・・・アメリカ

でも。社会を閉ざしている人々に対する防衛策として、我々自身が社会を閉ざすのは間違。そうなれば我々までもがオキシデンタリストとなって、守るべきものなど何一つなくなってしまう。

日本語版へのあとがき

- * この本に対する批判：「西洋非難の正当な理由を無視している」
- * 定義＝特定の政策や国家にではなく、ある種の生き方や社会、および政治のあり方に向けられる「殺人的な憎悪」のことをさす。
- * オキシデンタリストが共有するのは「清浄」という理想像。
- * オキシデンタリズムは「文明の衝突」ではなく、破壊的な「思想の衝突」
- * この本の目的＝戦略、政策のためではない。一体何が、西洋への戦いの中で敵を殺し、死んでゆくという行動に人を駆り立てるのか。それを探ること。